伝えたい事なんてありません!!

二天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
伝えたい事なんてありません！！

【Ｎコード】
Ｎ５２０５Ｎ

【作者名】
二天

【あらすじ】
この物語に伝えたい事なんてありません。
パソコンのキーボードを思うがままに駆けていった結果出来た物語です。
なのであまり深く考える事をお勧めしません。というか出来ません！！
そんな内容ですが、もしよかったら覗いていってください。

馬鹿やろう。ふざけんな。どっかいっちまえ。
ああ、腹が立つ。どうしてこんなに腹が立つんだ。いっそのこと冷蔵庫に一週間居候でもさせてもらってグッツグツ沸騰した脳みそをアイスクリームにして食べてしまいたい。・・・・・・もしそうしたら、冷蔵庫の滞在料は誰に払えばいいんだ？
馬鹿！！そんなことはどうでも良いんだ、そもそも冷蔵庫に滞在料なんてあるものか。たとえあったとしても俺は無一文なんだ。誰が払うものか。あまりに馬鹿な考えをするから余計に腹立たしくなってしまったじゃないか。どうしてくれる。
ああ神様、いや神様なんているとは思わない、今俺にいる「かみさま」は極悪非道な「上様」くらいなものだ。
我が家の戸の外に居るときは、それはもう天使のような笑顔を見せている俺の妻。しかし戸の中に居るときはそれはもう恐ろしや、一体何が彼女をそう変貌させるのか。家の戸？家の戸が妻をあんなにも変わらせるのか？・・・・・・そう思いたい。
長々と語ってきたが、結局俺の怒りの原因はそんな彼女から来ているのだ。

・

今俺は一人この部屋に居る。六畳の和室。我が家では一番豪華・・・・・に見える部屋だ。中央にはちゃぶ台が、ぽんと乗っており、壁は土壁・・・・・に見せかけた貼り壁になっている。そしてそんな騙し壁が４方ある中の１つに真っ白な襖（ふすま）がある。あまりに白く、不似合いすぎて浮いている。
まぁそんな和室でも、この家の中ではトップクラス。ちなみに他

の部屋は恥ずかしくて言えない。フローリングの床とだけ言っておこう。何せ次にきれいな部屋がトイレなのだから。
とにかく俺は和室にいて、むちゃくちゃ腹を立てていたのだ。それはもう、ゴキブリなんて現れようものならふんずけてちゃぶ台で押しつぶしてくれる。
今は妻の顔などどうでもいい。見たくない、会いたくもない、知るものか。
俺はほぼ無意識の内にちゃぶ台を叩いた。手に電気のようなびりびり感が流れる。自分自身驚くほど強く叩いていた。
しかしもっと驚いたのは次の瞬間。襖が、叩いたちゃぶ台の数倍大きな音を立てて開いたのである。開いた瞬間、俺は般若を見た。

・

「あんた、なんなの今の音、馬鹿じゃないの」

亭主に向かって馬鹿とは何だ。般若！腹を立てたから叩いたんだ、今の音は俺の怒りのボルテージを示しているんだ。俺が馬鹿ならお前は阿呆な般若だ。やーい阿呆般若！！

「馬鹿とは何だ、俺を誰だと思ってやがる」

「今言ったでしょ、馬鹿よ馬鹿！！私はあなたを馬鹿と思ってるわ」

俺は泣きたくなった。そうなのだ、実は俺は心が弱いのだ。妻にここまで言われると、心が砕けそうになる。砕けたかもしれない。

「あまりそういわないでくれ・・・・・・ちょっと俺は腹を立てただけなんだ」

ああ弱い自分。これが俺だと思うと情けなくて仕方ない。般若はちっとも納得する様子を見せていなかった。というよりむしろ般若が進化して閻魔(えんま)になっている。

「俺はな、お前のその般若、いや閻魔みたいな性格に腹を立てただけなんだ。たのむから昔のお前に戻ってくれ、玄関を出た瞬間から始まる天使でいてくれ」

俺の言葉で感動してくれたのか、妻は震えて、和室を駆け出していった。きっと感動の涙を見せたくなかったのだろう照れ屋な妻だ。正直にすみませんでしたと俺に飛びついてくればいいものを。その、実は純粋な涙を隠す必要なんてどこにもないんだ。俺ら夫婦だろ。

・

くそう、馬鹿妻!!はんにゃ、おに、えんまの馬鹿やろう!!!戻ってきたかと思ったらバケツに水をいっぱいに担いできて俺にぶっ掛けやがった。どういうことだ、笑顔で迎えていた俺が馬鹿みたいじゃないか、面目丸つぶれだ、水をいっぱいに飲んでしまった。

「何だよお前、どういうことだ」

「馬鹿にするんじゃねぇよくそじじい、あたしゃ意地ってもんがあるってんだ。あんな罵声食わされて、黙っていられるっっけんどんがどこに居るってんだ!!あたしゃ怒ったからね」

そういってぷいと振り向き、彼女は部屋を出て行った。

一人取り残された俺。・・・・・・もともと一人だったがすごく孤独感を感じた。

怒りは・・・・・・ない。水をぶっかけられて、そのあまりの冷たさに怒りが冷めたようだった。なんだろこの心に穴の開いた感じ。

しかし、その心にあいた穴は瞬時に愛情で埋め尽くされていった。どうして男ってこうも単純な思考ができるものなのだろう。

彼女は、俺の妻はきっと俺の怒りを静めてくれたのだ。暖かい愛情で狂った俺を怒りの地獄から救済してくれたんだ。

そう思うと俺の馬鹿が目の前にみえるような気さえする。馬鹿の塊がもじゃもじゃとちゃぶ台の上でうごめいている。迷わずちゃぶ台をひっくり返した。

「ありがとう。お前は俺の一生の宝物だ」

ちゃぶ台がすさまじい音を立てる。その音を背中に、俺は彼女の元へと向かった。

そのあとどうなったかは書くまでもない・・・・・・。

ハッピーエンドといっておこう・・・・・・。

なにせ俺はハッピーエンドが大好きだから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5205n/

伝えたい事なんてありません!!

2010年10月10日15時13分発行